

岡 元司著

宋代沿海地域社會史研究

—— ネットワークと地域文化 ——

小林 義 廣

—

本書は、二〇〇九年一〇月三日に四八歳の若さで病歿された岡元司^{もと}氏の遺稿集である。書名は、本書の編輯委員會・實行委員會が附した「凡例」によると、岡氏が生前に書き留めていた「博士論文構想」から取ったとあり、氏の意圖に沿った命名といえよう。事實、氏の研究生生活を顧みるとき、書名に含まれる「地域社會」という語句に、生涯を通して一貫してこだわり続けた研究対象・研究方法が象徴的に示されている。

周知のように、敗戦を契機とした日本の中國史研究は、戦前において大陸侵略を結果的に正當化することになったアジア社會（中國社會）停滯論の克服を掲げて再出發した。そして、その課題を具體化するために、理論的には史的唯物論を中心として、更にはマックス・ウェーバーの理論をも加味した社會經濟史的研究を主流とする研究が一九七〇年代までに進められてきた。⁽¹⁾しかし、宋代以後の研究に限ってみても、地主Ⅱ佃戶制を生産關係の中軸

に据えた社會經濟史的研究は、多くの貴重な成果を生み出しながらも、一九八〇年代に入ると、こうした生産關係だけでは捉えきれない、中國社會特有の仕組みや人的關係に目が向けられるようになった。地域社會論も、そうした新しい試みの一つであった。それを提唱した森正夫氏は、地主Ⅱ佃戶制という生産關係に収まりきれない基層社會の秩序を、儒教的教養に基づく士大夫を媒介とする指導者と被指導者によって自覺的に作り出されるものと規定し、そこから新たな中國社會像を描定しようとした。⁽²⁾この「地域社會」論は明清史研究を中心として展開されたが、本書にも繰り返し觸れられているように、宋代史研究にも及んで一分野を形成して、現在まで研究が進められてきた。著者の岡氏は、その中核を擔っていた。とすれば、氏の「地域社會論」あるいは「地域社會史」には、どのような独自の特色があり、そして本書のもう一つの題名を構成する「沿海」とどのように関わっているのだろうか。以下の叙述の中で、それらが明示できれば、この書評の役割を無事に果たせたといえよう。

二

本書の内容を簡単に紹介する前に、本書の目次を示しておく。

第一部…地域社會史研究と方法論

第1章 地域社會史研究

第2章 宋代の地域社會と知——學際的視點からみた課題

第3章 宋代地域社會史研究と空間・コミュニケーション

第2部…エリートの活動と地域社會

第4章 南宋期における科擧

——試官の分析を中心に——

第5章 南宋期溫州の民族と科擧

第6章 南宋期溫州の地方行政をめぐる人的結合

——永嘉學派との關聯を中心に——

第7章 南宋期の地域社會における知の能力の形成と家庭環境

——水心文集墓誌銘の分析から——

第8章 南宋期の地域社會における「友」

第9章 南宋期溫州の思想家と日常空間

——東南沿海社會における地域文化の多層性——

第10章 南宋期浙東における墓と地域社會

——對岸社會の一斷面——

第11章 宋代明州の史氏一族と東錢湖墓群

第12章 宋代における沿海周緣縣の文化的成長

——溫州平陽縣を事例として——

第3部…基層社會の變容と信仰

——地域社會から東アジア海域まで——

第13章 沿海地域社會を歩く——南宋時代溫州の地域文化が育まれた空間——

附録

第14章 宋元時代の浙東沿海地域社會とマニ教

疫病多發地帯としての南宋期兩浙路

——環境・醫療・信仰と日宋交流——

第15章 中世日本における疫病・信仰と宋文化

——「海の道」がつなぐ東アジア——

第16章 海をとりまく日常性の構造

第4部…地域社會と環境

第17章 南宋期浙東海港都市の停滯と森林環境

第18章 周防から明州へ——木材はなぜ運ばれたか——

第19章 中國の森林環境を考える旅

第20章 地中海と東アジア海域の環境に關する覺書

第21章 環境問題の歴史からみた中國社會

——森林・傳染病・食生活——

岡元司略歴・業績目錄

後序1 山根直生

後序2 寺地邊

あとがき

索引

目次をみて分かるように、本書は、全體で二一章から成り立ち、その二一章は、第1部（三章）、第2部（九章）、第3部（四章）、第4部（五章）の四部構成となっている。後序の二つの文章は、『廣島東洋史學報』一四號（二〇〇九年十二月）に掲載された追悼文の再録であり、山根氏は廣島大學の後輩かつ受業生の代表者として、寺地氏は著者の恩師代表者として選ばれたのであろう。それでは、各章節は、どのような内容となっているのだろうか。第1部は、宋代地域社會史研究の整理と展望を論じた三つの章から成り立っている。第1章は、主に一九八〇年代以降の、戦後日本における宋代地域社會史研究の歩みと、その研究の中心をなす華北・華中・華南といった各地域の研究状況（華中に研究が集中

している)とを辿りながら、今後の研究方向を五つの提言に纏めている。その提言は、本書全體の内容とも關わる著者の志向を反映しており、煩瑣を厭わずに紹介しておこう。① エリート文化だけでなく庶民文化をも視野に入れる必要性。② 地域經濟史と地域社會史との有機的聯關性を高める必要性。③ 地域社會というミクロ世界を、より廣い空間との關わり、場合によつて地域社會を通して國家をも超える空間との關わりで捉える必要性。④ 地域社會の共同性がどのようにして形成されたのかを、ことに近年盛んにいわれる「中間領域」と關聯させて考察する必要性。⑤ 國家の役割を相對化する意味からも、國家を地域社會から照射するという方法論的必要性。

第2章は、次のような議論を展開する。一九九〇年代から本格化した宋代地域社會史研究は、エリートを中心として考察されてきたが、たとえそうであっても、今後はエリートの活動を單に地域に限定するのではなく、地域を超えた人的繋がりや國家との關わりをも視野に入れるべきである。その際、中國のエリートが科擧を通じて國家と結びついているという中國の「知」の特質からすれば、エリートと文人の結びつきの場、とくに書院を媒介とした人士同士の繋がりや、そこで繰り廣げられる議論の在り方の側面に注目すべきだ、と。第3章では、エリート層を中心とする従前の宋代地域社會史研究の、その研究の幅を廣げるためには、地域に「空間」という概念を導入して、その地域空間で繰り廣げられる人びとの交流やコミュニケーションに着目する必要がある、と。そうして始めて地域を對象とする研究は、宋代という時代を超えて長期的な視野を提供しようと主張する。

第2部は、溫州を含む浙東地域を對象とする個別研究を収めており、それらは著者の具體的研究成果の核心ともいふべき部分である。第4章は、南宋期の科擧における省試・四川省類試・國子監發解の試験を擔當する試官の出身地が、科擧合格者の多い兩浙路や福建路に集中している點と、兩浙東路の試官を務めた人物やその一族と進士合格者を輩出する一族との間に極めて密接な關係を有する點を取り上げて、科擧において試官との繋がりを受験生に有利に作用したと指摘している。第5章は、南宋時期に永嘉學派を生み出した溫州の名族を取り上げ、まず永嘉學派は溫州の名族の繁榮と重なり合う形で活動していたと指摘する。次に、名族の再生産に科擧は大きな役割を果たしたが、科擧合格には「科擧官」(試官)と、太學や國子監などの學官との繋がり、更には政治中樞に位置する人との繋がりが必要な意味をもっていたという。そして、最後に、こうした溫州の繁榮は明清時代に受け繼がれず、繁榮は浙江の北部に移ったと述べる。第6章は、北宋末から南宋時期における溫州の地方行政と地域社會との關係を取り上げ、次のように論じている。溫州は北宋末の方臘の亂と同時期に、マニ教の影響を受けた民衆反亂に見舞われたが、その秩序再建に當地の名族や永嘉學派の人士が地方行政と協力して大きな役割を果たした。また、溫州に赴任した地方官には明州を中心とする四明學派に屬する人物が多く、明州と溫州の人士は互いに中央官界で推薦しあう関係であった。そして溫州出身の官僚は地元の要望を中央に伝えるパイプ役となつて、溫州の發展に深く關わっていた、と。第7章は、葉適の『水心文集』に載る墓誌銘(一四八點)や行狀(三點)を材料にして、次のような指摘をしている。

これらの墓誌銘・行狀に載るのは、多くが浙東出身者であり、葉適は若いときから彼らと學問や官僚社會での結びつきを通じて人間關係を形成してきた。當該人物の評價基準としては、作詩能力・暗記能力・文章力・讀書量・議論を通しての知的鍊磨という五つの知的側面が挙げられ、こうした知的能力を育む家庭環境にも葉適は高い關心を寄せていた。そして、實は、こうした知的環境の存在こそが經濟力のみならず科擧合格に至る實質的な條件となっていた、と。第8章は、南宋期温州の代表的士大夫である王十朋・薛季宣・陳傅良・葉適が撰述した墓誌銘を手がかりに、社會的流動性の高い宋代においては、温州でも他の地域と同様に友情が社會的重要性を増し、「友」との意見交換は思想形成に影響を與え、友人關係は官界における人事面にも大きな意味をもっていたと論ずる。そして、地域社會や官界での地位を擔保するためには、名族や富裕層との間に友人としての繋がりを必要としていたとする。第9章は、温州の自然環境を最初に紹介しながら、當地の經濟・人口の變遷を後の明清時代までを射程に入れて辿り、その上に立つて、南宋期の温州の人士が居住し活躍する空間、温州人士相互の交流實態や士大夫と民衆文化との關わりを取り上げている。そして、温州の社會は社會的流動性が高く、士大夫は社會から遊離した人間關係に籠もっておらず、庶民信仰や庶民文化がエリート文化と共存・融合する方向性を持っていたと結論づけている。

第10章と第11章は、浙江北部の明州に焦點を當てている。第10章は、日宋貿易の據點であり、日本の商人や僧侶が多く訪れた明州（浙江省寧波市）を取り上げ、當地の埋葬をめぐる、埋葬に

至る時間、埋葬における風水の重要視、士大夫の喪葬觀に言及している。第11章は、二〇〇五年、著者によってなされた、明州郊外の東錢湖の東側に廣がる史氏一族の墓群の實態調査の具體的結果を紹介するとともに、次のような考察を行っている。明州は南宋政權にとって、軍事・交通・政治の要地であり、當地の史氏は、南宋期に三代に互って宰相を出し續けた名門であるが、その發展の契機は北宋末に科擧に合格した史才であり、その祖母の葉氏は史氏一族を望族とするために多大な貢獻をした。更に史氏は明州に居住した宗室一族と姻戚關係を結んで一族の基盤を確固とした。明州地域は晉代に山麓の陂塘を中心とした小規模な開發から始まって、南宋末には平野部に移り、時代が後になるに従って海岸低地部へと開發の重點を變化させていった、と。第12章は、再び宋代の温州に焦點を當て、とりわけ温州の最南端に位置する平陽縣の科擧合格者の縣内分布を分析して、宋代の温州において科擧合格者は、時代の推移とともに、州城のある中核縣から周緣縣に、そして南宋中後期以降、科擧の合格者の増大した平陽縣では、開發の進展に伴って山側地域から沿岸地域に移動していったと論ずる。

第三部は、温州を中心とした浙東地域の信仰と醫療の問題を取り扱っている。第13章の主張内容は、第9章をダイジェスト化したものだが、その章と異なる點は、著者が現地の温州で撮影した寫眞を通して、南宋期の温州の景觀を再現し、陳傅良・葉適といった永嘉學派の人士が活躍した場所や、民衆文化に影響を與えた農漁村に散在するマニ教の遺跡を紹介しようとしていることである。本章には、附録として浙東社會とマニ教の信仰に關する發

表レジュメを載せている。レジュメという性格上、著者の言いたいことには、隔靴搔痒の感があり、しかも発表場所と時期も明示されていない。ただ、元代に撰述され、現在の温州蒼南縣（南宋時期の平陽縣南部）に立碑された「選眞寺記」というマニ敎寺院に關する文章の丁寧な譯註は、民衆宗教研究に役立つといえよう。第14章は、南宋期の兩浙地域の開發は疫病の克服と聯動し、その克服の過程で當地に醫療が發達し、その醫療には士人だけでなく僧道も關わり、疫病に靈驗ある祠廟の發展がみられたと主張する。そして、最後に、こうした醫療や信仰（觀音信仰や羅漢信仰）が鎌倉時代の日本に大きな影響を与えていたと結ぶ。第15章の内容は、第14章の記述と多く重なるが、廣島縣福山市で行われた講演の記録という性質上、日本とくに瀬戸内との關わりの視點から構成を組み立て直している。第16章は、第14・第15章と記述内容が多く重なるが、この議論は、第20章で詳述するフェルナン・ブローデル（Fernand Braudel）の『地中海』を強く意識しており、そのためか東アジア諸地域間の特性や相互の交流を、この地域の氣候や地形といった自然環境を念頭に置いて立論している。

第四部は、環境問題を主軸に据えて、浙東地域社會や中國社會の特質、更には東アジア海域の歴史を取り上げている。第17章は、南宋期の温州・明州などの海港都市の發展が、近隣の山林の亂開發を伴って環境の悪化をもたらし、水災や干害といった自然災害を頻發させ、それらが複合して、元朝以後、當地の海港都市を衰退させていったと論ずる。第18章は、南宋期明州の寺院建設に日本の周防（現在の山口縣の一地域）産の木材が使用されたことを取り上げて、それが浙東地域の森林破壊によることを指摘し、更

には浙東地域と日本との貿易や信仰の交流などに言及している。いわば、本章は第17章のダイジェストとなっている。第19章は、著者が一九九八年に参加した黃土高原綠化のワーキングツアーや浙江地域の旅行での印象を語り、それとの關聯で環境問題に取り組む必要性や中國の環境問題が日本の環境と深く結びついている點を指摘して敘述を終えている。第20章は、前述したように、フェルナン・ブローデルの『地中海』の論點を整理して、地中海と東アジアの共通性と相違性を指摘し、その上に立つて、今後の東アジア沿海地域研究の課題を二つに纏めている。一つは、自然條件を意識した地域研究の本格的推進、二つ目は宗教史とも關聯の深い醫療史・疫病史と環境との關聯性を意識した地域研究だという。第21章は、中國史上における森林破壊・疫病と醫療・食文化と環境という問題を主に浙東地域を題材にして論じ、これらの問題は中國の周邊地域とも深い關聯性をもっていると指摘している。

三

以上、本書の内容を簡単に紹介した。紙幅の都合もあって、結果的に單純化しすぎて、著者の息遣いや議論の襞を無視した形になったかも知れない。それでも、著者が浙東という地域社會の有する歴史的意義を求めて、主に南宋時期を中心として研究を開始し、次第に當地を含む沿海地域を軸とした（日本をも含む）東アジア海域地域相互間の繋がりが、更に環境問題と疾病などというように、時間の経過とともに關心が擴大していった形姿とその論旨は傳えられたと思われる。言うまでもなく、こうした著者の

關心の廣がり、が自然と會得される本書の構成は、編輯に携わった方々の、著者の研究内容を十二分に理解された上でなされた優れた心憎いばかりの編輯方針に基づくものといえよう。

ところで、どれほど優れた書物にも論理や史料解讀に多少の瑕疵はつきものである。本書にも、そうした氣になる問題はある。しかし、著者は既に彼岸に旅立ち、評者とは幽明を異にしており、本書に對する批判や指摘を受け止めて應える術をもっていない。要するに、本書の問題點を言挙げすることは、著しく公平さを缺くと思われる。以下、本書の特色を中心に叙述を進めよう。

まず、本書を一讀して直ちに氣づくのは、取り上げたテーマに關聯する日・中・歐の研究文獻を貪欲に吸収しているだけでなく、併せて日本史とイスラム史の研究成果や、社會學と政治學といった近接學問領域の知見をも利用しようとする旺盛な研究意欲・態度を窺える點である。加えて、参照・利用する研究成果の對象時期を中國史に限ってみても、廣範圍に亘っており、研究の中心となつた宋代だけでなく、他の時代、ことに明清時期の研究文獻にも目配りしている。この、宋代以後の廣範圍な時代を射程に入れるという特色は、著者を地域史研究に導いた歐米の研究成果と密接に關わっているように思われる。

「後序」の山根直生氏の回想によると、岡元司氏は、ロバート・ハイムズ (Robert Hymes) 氏の研究に出會うことによつて、自分の研究に展望をもてたと語っていたという。周知のように、ハイムズ氏は、一九八六年に出版された著書において、⁴⁾ 兩宋時期の江西撫州 (江西省撫州市) を事例研究の舞臺として、士人・士大夫が地域社會のエリートとして、その家族・一族の存續を、ど

のような戰略と實踐を通して達成させようとしたのかを總合的に分析した。そして、こうした論旨を展開する中で、同氏は、南宋になると、中央での出世には關心をもたず、地域社會における威信の確立とその繼承や、地域社會での利害に關心を寄せる地方縉紳 (local elite) が擡頭してきたとして、北宋の士人・士大夫との志向性や生き残り戰略の相違を明示し、更には別の論文では、このような南宋時期の士人の在り方は元代にも受け繼がれていると述べている。⁵⁾ ハイムズ氏の指摘、ことに兩宋間の士人の、中央政治に對する志向性の相違という點は、一九八二年、恩師のロバート・ハートウェル (Robert Hartwell) 氏が公表した、いわゆる唐宋變革による歴史的變化の問題を、時間軸を延ばして、八世紀半ばから一六世紀中頃までの間に設定した論文にも盛られた内容であつた。そして、ハートウェル氏は、この論文において、長期的展望に立つて、人口・政治組織・政治の擔い手などの諸側面から分析を加えて、この長期に亙る歴史的變化の實相に迫ろうとした。しかも、同氏の歴史的變化の提言は、變化の様相を地域相互間と地域内のそれぞれの變化という、雙方向から捉えようとする視點に立つていた。ここにいう地域とは、中國全土を大河川とその流域から構成される九つの大地域 (macro-region) に區分したウィリアム・スキナー (William Skinner) 氏の構想に若干の修正を加えた地理的枠組みである。⁶⁾

本書に盛られる岡氏の地域社會研究の大半の各章 (一般向けの論説や講演記録は除いて) に、このハートウェル、ハイムズ兩氏の研究の一方あるいは雙方が觸れられているが、注目すべき點は、兩氏、とりわけハートウェル氏は、上述のように、中國社會の歴

史的變化の様相を、地域社會に視點を据えることによって捉えようとしていることである。ハートウェル氏は、この視點に立つて歴史的變化を捉えることで王朝を超越した立脚點を手に入れたが、このことは兩氏の研究に刺激を受けた岡氏の地域研究にも影響しているように思える。岡氏は、地域社會史研究を總括した第1章において、「地域」に研究對象の場を設定することは、決して視野を狭めることを意味せず、一つの場を通して、それに絡む様々な複合的な要因の關聯性の中で歴史的に考察するとともに、長期的な歴史の中で、宋代がもつ意味を考察することになると述べている(五頁)。この長期的視點の提供という提言は、第3章でも繰り返されるが(四九頁)、そこでは、更に「地域」に視點を据えた研究は、國家をも相對化すると言い換えられているとともに(四三頁)、「地域」という概念に「空間」という要素を付け加えることによって、「空間」を介して、中國という國家のみならず、日本や朝鮮という東アジア地域の個々の國家さえも超え、それらを包含した東アジア海域という對象に關心を移動させることを可能とする視點を獲得した(二六〇頁、第16章など)。

無論、國家を相對化するという岡氏の視角は、直ちに國家を輕視あるいは無視することの意味しない。著者は、第5章においてハートウェル、ハイムズ兩氏の所説の意義を認める一方で、それに對して、社會的・地域的エリートに政治的・國家的エリートと分離して語る點を批判したりチャード・デービス(Richard L. Davis)氏の所説を引用しつつ、「エリートの研究にあたっては、地域社會内部での存在形態と、彼らの國家的・政治的レベルでの活動を常に複眼的に分析することが求められている」と述べてい

る(八八頁)。この觀點から、著者は、科擧の試験官(試官)の出身地と科擧合格者が密接に聯關していることを論證した第4章、地方行政と在地士人の關係を分析した第6章、友人關係が士人・士大夫の日常的活動に大きな役割を果たしたと論じた第8章などで、在地・地域社會の士人・士大夫と中央官界や中央政府との結びつきを繰り返し強調している。

とはいえ、この、人的な繋がりを通して地域社會と國家が結びついているという論旨は、戦後、一九七〇年代頃まで盛んであった社會經濟史的研究方法とは明らかに異なる視角ではなからうか。今や、若い世代には些か古くさく、微の生えた議論でしかないかも知れぬが、岡氏の思考方法を明確にするために、まず、その點を再確認をしておこう。

戦後的な社會經濟史の觀點(史的唯物論)に立てば、國家とは、「抗争しあう經濟的利害をもつ諸階級が、無益な闘争のうちに自分自身と社會とを消盡させないためには、外見上社會の上に立つてこの抗争を和らげ、これを『秩序』の枠内に保つべき權力」なのであった⁷⁾。要するに、國家は、あくまで地域社會を含む基層社會の矛盾と對立の結果として説明されるべきものであり、地域社會と國家とは論理的に分ちがたく結びついて探求された。少し言い方を換えると、國家の歴史的特質は地域社會(基層社會)の階級關係をも含む矛盾や對立の所産であり、國家と地域社會の人的結びつきも、こうした背景の基に捉えられるべきであった。ここには、地域を基點にして國家を輕やかに超えられるという思考法は存在しないといえよう。そのことは、岡氏の論理にも何ほどか影響を與えた森正夫氏の地域社會論にも窺える。森氏の立論は、

生産關係論では捉えきれなかった、中國社會の様々な側面を射程に入れようとする意欲的な試みではあったが、氏自身も長年に互つて生産關係論的議論に参画していた故に、恐らく國家を超えようとする視點を持ち合わせていなかったのではなからうか。こうしてみると、現在、個別の國家を超えて深刻度を増している環境問題という優れて今日の問題さえも（このことが歴史上の環境問題に對する岡氏の着眼に刺激を與えている）、少なくとも社會經濟史的立場に馴染んだ研究者にとつては、國家と切り離せない問題群として立ち現れてくる。そして歴史時代の環境問題も、それに規定された取り組みがなされるのではなからうか。誤解を生じないように附言しておく、評者は岡氏の國家と地域社會の關係の捉え方が間違っていると云っているのではない。異なる世代では、同じ對象でも捉え方の思考法・方向性に相違が存在することを自覺的に認識しておくべきであり、その自覺の上に立つて地域社會と國家の問題を追求すべきだと考えるのである。

最後に、著者に全く責任はないが、本書を讀んで氣になった編輯上の問題は些か取り上げて置くべきと思われる。一つは、「葉適の宋代財政觀と財政改革案」（『史學研究』一九七、一九九二年）や、宋代中國における中間領域の存在を、ユルゲン・ハーバース（Jürgen Habermas）の「公共圏」理論を基に語った「宋代地域社會における人的結合——Public Sphereの再検討を手がかりとして——」（『アジア遊學』七、一九九九年）を本書から除外したのは何故なのかという問題である。前者は著者の研究の出發點となつた葉適の財政觀を扱った論文であり、後者は國家と地域社會とを結ぶ人的繋がりに着目した本書の論述や提言に端的に

示されるように（第6・7・8章や一七・三八頁の提言）、著者は中國における中間領域の存在解明にこだわっていたからである。二つ目は、本書の註に對する編輯方針をめぐる問題である。「凡例」によると、註は、基本的に初出時のままとするとある。この方針は基本的に正しいと思われる、しかも、原註そのままでは分かりにくい箇所には、編輯者が多少の改訂を施している。それにもかかわらず、そこにも問題がある。その一例が第11章の註2（二九〇頁）であり、そこには編者によつて、寧波市の東錢湖の史氏一族墓群を調査したメンバーの肩書きは調査當時のものだという註記がなされている。ただ、そうした補註を入れるならば、當然、本章のどこを見ても判然としない調査の日時を入れるべきではなかったろうか（前節の紹介文中の年次は、評者が補つたもの）。また、各章の註に見られる著者の論文は、原註のまま發表當時の雜誌名と雜誌發行年とが記されたままである。確かに、本書末の「岡元司業績目録」を見れば、著者の論文が本書の何章に載せられているかは判明するが、それでも關聯する註に補註として附け加えてもらえば、讀者の便宜をはかることになつたのではなからうか。

多くの業績を残しながら、道半ばにして四八年間の生涯を閉じなければならなかつた著者の無念を思うとき、馬齢を重ねるだけの評者は本書を讀み終えて表紙を閉じながら自ずと襟を正さざるをえなかつた。残念ながら、ありきたりの陳腐な言葉しか浮かばないが、著者の御冥福を祈つて擲筆したい。

註

- (1) 戦後日本の中國史研究が純粹の史的唯物論ではなく、マックス・ウェーバーの理論をも混在させたものであったことは、ジョシユア・フォーゲル (Joshua A. Fogel) 氏による谷川道雄『中國中世社會と共同体』(國書刊行會、一九七六年)の英譯本(これは全譯ではなく、中世社會と共同体の理論的部分のみの翻譯)の序文 (Translator's Introduction) に簡にして要を得た解説がなされている (Tanigawa Michio, *Medieval Chinese Society and the Local "Community"*, California U. P., 1985)。
- (2) この地域社會論は、一九八一年に岐阜縣中津川市で名古屋大學東洋史學研究室主催の下に開催されたシンポジウムで提起され、このシンポジウムの成果は、名古屋大學東洋史學研究室編『地域社會の視點——地域社會とリーダー』(名古屋大學文學部東洋史學研究室、一九八二年三月)として纏められた。このシンポジウムを起點とする地域社會論のその後の展開と意義については、岸本美緒『明清交替期と江南社會——一七世紀中國の秩序問題』(東京大學出版會、一九九九年)「序」や伊藤正彦『中國史研究の『中國社會論』——方法的特質と意義』(『歴史評論』五八二、一九九八年、同氏著『宋元鄉村社會史論——明初里甲制體制の形成過程』汲古書院、二〇一〇年所収)などに詳論されている。
- (3) この追悼文の原載雜誌の名稱・號數・發行年は、山根直生氏の示教による。
- (4) Robert Hymes, *Statesmen and Gentlemen: The elite of Fu-chou, Chiangsi, in Northern and Southern Sung*, Cambridge U. P., 1986.
- (5) Robert Hymes, "Marriage, Descent Groups, and the Localist Strategy in Sung and Yuan Fu-chou," ed. Patricia B. Ebrey and James L. Watson, *Kinship Organization in Late Imperial China 1000-1940*, California U. P., 1986.
- (6) Robert Hartwell, "Demographic, Political, and Social Transformations of China, 750-1550," *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 42-2, 1982. William Skinner, "Regional Urbanization in Nineteenth-Century China," William Skinner ed. *The City in Imperial China*, Stanford U. P., 1977, pp. 211-220. なお、この論文は今井清一氏によって邦譯されている(『中國王朝末期の都市』晃陽書房、一九八九年)。
- (7) エンゲルス『家族・私有財産・國家の起源』(岩波文庫本、一九六五年)二二五頁。

二〇一二年五月 東京 汲古書院
A五判 四十五四五頁 一四〇〇〇圓十税